

たまものまえあさひのたもと

玉藻前曦袂

〔解 説〕文化三年（一八〇六）大阪御霊境内芝居初演。寛延四年（一七五一）大坂豊竹座初演を書きかえた五段・時代物。初段は天竺、二段目は唐土、三段目以降は日本が舞台となっています。金毛九尾の妖狐が三国を股にかけて国家転覆を企て、最後には失敗して那須野が原の殺生石になるというのが全体の筋です。

〔あらすじ〕鳥羽院の兄宮・薄雲皇子は反逆を企て、鷲塚金藤次に命じて故右大臣道春家に伝わる獅子王の剣を盗ませます。また道春の娘・桂姫を差し出すよう迫りますが、安倍晴明の弟・采女之助に恋する桂姫は拒否していました。〔道春館の段〕道春の後室・萩の方が采女之助に獅子王の剣の探索を頼んでいると、薄雲皇子の使いとして鷲塚金藤次がやってきて、獅子王の剣を差し出すか、桂姫の首を討って渡すかを迫ります。萩の方は桂姫が祇園参籠の帰りに拾った子であることを明かし、実子の初花姫を身代わりにと頼みますが、金藤次は聞き入れません。そこで萩の方は姉妹に双六をさせ、負けた方の首を討つように頼みます。姉妹は自分が犠牲にと双六を競い、妹の初花姫が負けますが、金藤次が討ったのは桂姫でした。怒った采女之助に刺され深手を追った金藤次は、実は桂姫は自分の娘であることと、獅子王の剣も薄雲皇子の命令で自分が盗んだことを語り、息絶えます。

道春館の段

入相時。早や夕陽も傾きて、無常を告ぐる鐘の音もいとゞ、淋しき黄昏や、間毎を、照らす銀燭の光り、まばゆき白書院、程もあらせず入来る鷲塚金藤次秀国素袍の肩肘いかつげに、上座にこそは押し直る。かくと知らせに館の後室。衣紋正しく出迎ひ

「御上使様には御苦勞千万、皇子様より御詫の趣き、仰せ聞けられ下さりませ」

と、辞讓の言葉に一揖し

「上意の次第余の儀にあらず、皇子かねぐ御懇望ありし獅子王の劍、今日中にさし上ぐるか、さなくば、娘桂姫が首討つて渡さるか、二つに一つの御返答、ただ今仰せ聞けられよ」

「ハアこは存じがけなき御難題。その劍は紛失致し、所々方々と尋ねれども、今において行方知れず、今しばらくの御容赦を」

「ア、イヤそりやならぬ。皇子御心をかけられし桂姫、たび／＼催促あると言へども、とやかくと言ひ延ばし、打捨て置かるゝ事、貴族の威勢にぶきに似たりと以てのほか御憤り、劍がなくなれば桂姫、首にしてお渡しなされ」

と退引きさせぬ釘鏝、胸にひつしと萩の方、途方涙にくれ給ふ。後に始終桂姫、こなたの間には初花が忍んで様子立聞くと、知らず御台は涙をはらひ

「とても手詰めになる上は、いづれ遁れぬ娘が命、未練の申し事ながら、一通り聞いてたべ。過ぎ去り給ふ夫道春、夫婦の中に子なきを憂ひ、清水のほとりなる、三神の社へ立願込め、三七日の参籠、その帰るさに産子の泣声、肌上添へしは雌竜の鋏形、ア由ある人の胤ならん、神の御告げと連れ帰り、育て上げしは桂姫、間もなく設けしアノ初花、右と左に月花と、眺め暮らせし姉妹を、是非に一人はない命。殺さにやらぬ品となる。イヤなう御上使。武士は、物の哀れを知るといふ。自らが一つの願ひはコレこの双六盤。二人の命

を天道の指図に任せ、負けたる方の首を討たば、せめてはそれを定業とあきらめらるゝ事もあらう。どうぞこの儀を御了簡」

「エ、さまぐゝの世迷言、見物するもまどろしけれど、ハテ何とせう是非がない、サきりゝとお始めなされ、ガ勝負の付くがすぐに寂滅」

「ヲ、なるほどゝ、それと明かさば女気の、歎きに心かきくもり、取り乱しては詮もなし、たゞよそながら暇乞ひ、一思ひに」

と言ひさして、詞泣くゝ母親が、『これが冥途の使ひか』と、思へどいとゞせきのぼす胸は子ゆゑの五月闇、あやめも分かぬくもり声、

「娘々」

と呼び出す

「アイ」

と返事も一樣に、かくとは誰も白小袖、死出の晴着と姉妹が、姿も対の雪柳、しをれ出でたる屠所の道。羊の歩みたどゝと最期の、座にぞ押直る。一目見るよ

り萩の方『さてはやうすを聞きしか』と、先を取られて今更に、とかう答へも涙なる。母の歎きにかき曇る心は月の桂姫。やうゝに顔を上げ

「委細のやうすはさつきにから、残らず聞いてをりました。ねぐら離れし時鳥、子で子にあらぬ自らを、この年月の御養育、まだその上に妹まで自らを助けんとかさまぐゝの心遣ひ、思ひ廻せば廻す程空恐ろしい身の冥加、胸に迫つて一言もお礼は口へは出ぬはいなア。

こんな憂き目を見せますも皆自らがいたづらから、とても叶はぬ恋ゆゑと、覚悟は極めてをりました。露塵御恩を送りもせず先立ちます不孝の罪、お許しなされて下さりませ。産みの父上母様はどこにどうしてござるやら、命の際にたゞ一目、逢うて死にたい顔見たいこればかりが」

と言ひさして声くもらせば初花姫

「ナウ曲もないそのお詞、たとへいづれの胤なりともわらはが為には大事の姉様、お前は殺さぬ自らを」

「イヤナウそもじは存へて、頼り少ない母上にお宮仕

へを頼むぞや」

「イヤ自らを」

「イヤわらは」

と死を争ひし姉妹の、心根不憫と母親は、いづれをそれと分け兼ねる胸は涙の三つ瀬川、身も浮くばかり歎きしが

ふたつちようちようくるわにつき

双蝶々曲輪日記

〔解説〕 竹田出雲（たけだいずも）、三好松洛（みよししょうらく）、並木千柳（なみきせんりゅう）の合作。

寛延二年（一七四九）大阪竹本座にて初演。近松門左衛門らの作品をもとに再構成された全九段の世話物。外題の「双蝶々」は二人の力士の長五郎と長吉に因んだといわれ、二段目「角力場」、八段目「引窓」が特に有名で度々上演されます。それぞれの場で肉親の情が深く描かれた名作となっています。

〔あらすじ〕 人気力士の濡髪長五郎と素人力士長吉、またそれぞれを鼻屑する山崎屋と武士の平岡、山崎屋の息子与五郎と遊女吾妻を中心に話は展開します。

与五郎と平岡は、遊女吾妻をめぐる恋敵でしたが、その争いは閑取の長五郎と長吉の角力の土俵に持ち込まれ喧嘩となります。一方、平岡はなんとかして吾妻を我が物にしようと、難波裏で与五郎と吾妻を捕らえます。それを知った長五郎が駆けつけますが、争いとなり相手方を殺めてしまいます。与五郎、吾妻を長吉に託した長五郎は、もはや己は逃げ切れまいと、幼い時に別れた実母を訪ねて八幡へ赴きます。

長五郎の母にとって義理の息子である与兵衛は、折しも庄屋代官に任せられ、父の名、十兵衛を継いだところです。またその最初の役目がお尋ね者となった濡髪長五郎の探索でした。長五郎とは旧知の仲で、今は十兵衛（与兵衛）の妻となっているお早は、母ともども、なんとか長五郎を逃がそうと苦心します。その事情を察した十兵衛は、義理の兄である長五郎にそれとなく逃げ道を教えます。一度は義理のため十兵衛に捕らえられようと思っ

た長五郎でしたが、それぞれの恩を胸に落ち延びて行くのでした。

八幡里引窓の段

二階へ萎れ往く

人の出世は時知れず見出しに預かり南与兵衛。衣類大小申し請け伴ふ武士は何者か所目馴れぬ血氣の兩人。家来もその身も立ち留まり

「これが貴公の御宿所とな。イザ御案内」

「御先へ」

と互ひに辞儀合ひ、南与兵衛。いそ／＼としてうちへ入り

「母者人女房。ムたゞ今帰った」

「ヤアお帰りか」

「戻りやったか。お上の首尾はどうぢやの／＼」

「お悦びなされ極上々」

「マア嬉しい」

「即ちこの如く衣類大小下し置かれ、名も十次兵衛と親の名に改め下され、昔の通り庄屋代官を仰せ付けられ、七ヶ村の支配」

「ヤレ／＼それは目出たい事。ム、見れば表にお歴々が見えるがアリヤマアどなたぞ」

「あれは西国方のお侍。密々に仰せ合はさるゝ事あつて御同道。ア、さして隠す程の事ではなけれど暫く母人も御遠慮。女房も用事あるまで差し控へよ」と云ひ渡し、表へ出づれば

嫁、姑

「今からは武士付き合ひ、遠慮が多い」

ともの馴れし、母と、嫁とは立ち別れ奥と口とへ入りにけり

「イザお通り」

と兩人の、武士を上座へ押し直し

「今日殿の御前にて仰せ付けられし密かの御用。仔細は各々方に承れとの儀。まずそのお尋ね者の科の様子、お物語り」

と尋ねれば、年長なる侍取り敢へず

「拙者は平岡丹平、これなるは三原伝蔵と申して、主人の名はお上にもよつく御存じ。当春大坂表にて、両人の同苗どもを殺され、方々と詮議致せど、討つたる相手方知れず。この間承はればこの八幡近在に由縁あつて立ち越えたと申す。さるによつて当役所へお頼み申せしに『兄弟の敵随分見付け召し捕られよ。しかし夜に入つては当地不案内、所に馴れたる者に申し付け、縄掛け渡さん』とあつてナソレ、貴殿へ仰せ付けられた。仔細と申すはかくの通り」と、語るを一間に母親が、耳そば立つれば

こなたには女房おはやが立ち聞きの虫が知らすか

胸騒ぎ

与兵衛は何の心も付かず

「しからば敵討ち同然、隠密々々。もし左様の儀もあらうかと母女房まで退け、御内意を承はるが何と、その討たれさつしやつた御同苗のお名はな」

「身が弟は郷左衛門」

「手前が兄は有右衛門」

「アノ平岡郷左衛門、三原有右衛門とな」

「如何にも」

「フム」

「御存じかな」

「アイヤ承つたやうにも。ム、してその殺したる者は何者」

「サアその相手は相撲仲間、隠れもなき、濡髪、長

五郎」

と、聞いて母親障子をびっしやり

おはやは運ぶ茶碗をぐわったり

「ハテ不調法な」

と叱る夫の側に座し、なほも様子を聞きぬたる

「シテ御両所は何処を目当て」

「まづこの丹平は、当所を家捜しが致したい」

「御尤も〜。伝蔵殿には思し召し寄りは何と」

「手前が存ずるには、最前其許へお頼み申した絵姿

を、村々へ配り置き、油断の体に見せ、どか〜

と踏み込み、牛部屋柴部屋あるひはコウ二階などを

吟味致したいテへ〜、」

「それも尤も。大きな体、下家にはをりますまい。

とかく二階が心許ない。まづ御両所は楠葉橋本の辺

を御詮議なされ。夜に入らば拙者が受け取り、たと

へ相撲取りでござらうがまた、柔術取りでござらう

が、見付け次第に縄打ってお渡し申さん。その段そつとも」

「ヤレ〜その詞を聞いて安堵々々。イザ丹平殿

楠葉辺へ参らうか」

「如何様日の内は随分我々が働き、夜に入ってお頼

み申すが肝心。早やお暇」

「しからばまた晩程役所にて御意得ませう」

「エ、エ、左様〜」

と目礼し、二人の武士は立ち帰る

おはやは始終物案じ差し俯向いてゐたりしが

「申し与兵衛様。味な事を頼まれなされ、長五郎と

やらを捕つて出そとの請け合ひは、そりやマア、お

前ほんの気かえ」

「ハテ気疎いものの云ひ様。あの侍に由縁もなく、

元より長五郎に意趣もなければ、いまの兩人が願ひ

によつてお上よりこの与兵衛に仰せ付けられたその仔細は、関口流の一手も、覚えある事お聞き及びあつて、『役人どもに申し付くる筈なれども、当所へ来て間もなく不案内。住み馴れたその方に申し付くる。日の内はあの方より詮議せん。夜に入つてはこの方より隅々まで詮議し何とぞ搦め捕つて渡せ、国の誉れ』とあつてのお頼み。イヤモ一生の外聞。召し捕つて手柄の程を見せたらば、母人にもさぞお悦び」

「イエ〜何のそれがお嬉しからうぞ」

「何故」

「ハテ昔はともあれ、昨日今日までは八幡の町の町人。生兵法大疵の基と、ひよつとお怪我でもなされた時は、お袋様の悲しみ。何のお悦びでござんせう」

「ヤアいらざる女の差し出。わりや手柄の先折るか」

「ムハテ折るも一つはお前の為」

「ヤア此奴が、何で濡髪をかばい立て。たゞしはおのれが一門か。何にもせよ御前で請け合ひ見出しに逢うたこの与兵衛。今までとは違ふ。詞返さば手は見せぬ」

と、きつぱ廻せば

「ヤレ夫婦の争ひ必ず無用」

と、母は一間を立ち出で

「最前からの様子残らずあれにて聞きました。ガ何とその濡髪長五郎と云ふ者、そなたよう見知つてか」

「サレバ一度堀江の相撲で見受け、その後色里にて

一寸の出会い、イヤモ隠れもない大前髪。確か右の高頬にほくろ。オ、見知らぬ者もあらうとあつて、村々へ配る人相書。コレ御覧なされ」

と懐中より、出して見せたる姿絵を

「どれ」

と見る母二階より、覗く長五郎、手洗鉢、水に姿が映ると知らず

目ばやき与兵衛が、水鏡きつと見付けて見上ぐるを敏きおはやが引窓びつしやり、内は真夜となりになる

「コリヤ何とする女房」

「ハテ雨もぼろつく、もはや日の暮れ、灯をともして上げませう」

「ハテナ、面白い〜。日が暮れたればこの与兵衛が役。忍びをるお尋ね者。イデ召し捕らん」

とすつくと立つ

「それまだ日が高い」

と引窓ぐわらり、明けて云はれぬ女房の、心遣ひぞせつなけれ

母は手箱に嗜みし、銀一包み取り出し

「これはコレ御坊へ差し上げ、永代経を読んで貰ひ未来を助からうと思ふ大切な銀なれども、手放す心を推量して、何とその絵姿私に売ってたもらぬか」

「ム、母者人二十年以前に御実子を、大坂へ養子に遣はされたと聞いたが、何とその御子息は今に堅固でござるか」

「与兵衛。村々へ渡すその絵姿。どうぞ買ひたい」

「ハア鳥の粟を拾ふ様に貯め置かれたその銀。仏へ上げる布施物を費やしても、この絵姿がお買ひなされたいか」

「未来は奈落へ沈むとも、今の思ひには代へられぬわいの」

「ハッエ是非もなや」

と大小投げ出し

「両腰差せば十次兵衛。丸腰なれば今までの通りの
与兵衛。相変はらずの八幡の町人、商人の代物、お
望みならば上げませうかい」

「アノ売って下さるか、それではこなたの」

「アイヤ申し日の内は私が役目でござりませぬ」

「ハア忝や」

と戴く母。袖はかわかぬ涙の海

嫁は見る目を押し拭ひ

「イヤ申し与兵衛様。あまり母御様のお心根が痛は
しさに、大事の手柄を支へました。さぞ憎い奴不届
者とお叱りもあらうが、産みの子よりも大切に、可
愛がつて下さる御恩。せめてはお力にと共々に隠し
ました。常々からも万事の品、包むと思つて下さん
すな」

と、中に立つ身の切なさを、云ひ訳涙に

時移り、哀れ数そふ暮れの鐘、隈なき月も待宵の光
映れば

「夜に入れば村々を詮議するわが役目。河内へ越ゆ
る抜け道は、狐川を左に取り、右へ渡つて山越えに
く、よもやそれへは往くまい」

と、それと知らして駆け出づる。情も厚き藪畳。折
から月の雲隠れ忍びて、様子を窺ひある

堪へかねたる長五郎二階より飛んで下り、表を指し
て駆け出だすを

母は抱き止め

「ヤイこゝな狼狽者何処へ行く」

「イヤ最前より尋常に縄掛からうと存じたれども、
あまりと申せばお志のありがたさ。眼前歎きを見せ
ませうよりは、この家を離れてと、堪へに堪へてを
りましたが、与兵衛殿の手前もあり、後よりぼつ付

き捕られる覚悟。御赦されて」

と駆け出だすを

取って引き据ゑ

「ヤイこゝなもの知らずめ。俺ばかりか嫁の志。与兵衛の情まで無にしをるか罰当たりめ。なさぬ仲の心を疑ひ、絵姿を買はうと云ひ掛けたは、『見通してたもるかたもらぬか』と、胸の内を聞かう為、売ってくれたその時の嬉しさ。おりや後影を拝んだわい／＼。まだその上に河内へ越える抜け道まで教へてくれた大恩を、おのりや／＼何と報じやうと思ひをるぞ。コリヤヤイ。死ぬるばかりが男ではないぞよ。七十近い親持つて、喧嘩口論。人を殺すと云ふ様な、不孝な子が世にあらうか。来るとそのまゝ欠け碗に、一盛と望んだは、おのりや牢へサ、牢へ入る覚悟ぢやな。それがどう見てゐられうぞ。せめ

て親への孝行に、遁れるだけは遁れてくれ。コリヤ

生きられるだけは生きてたも。何の因果で科人に、

なつた事ぢや」

とどうと伏し、前後不覚に泣き叫ぶ

おはやも共にせきのぼす、涙押さへて

「申し／＼、泣いてござる所ぢやないぞえ。夜が明

くれば放生会で人立ちが多い。今宵の内に落とす思案。どうぞ姿を変へる仕様はあるまいかな」

「オ、それも心付いて置きました。ガマア目に立つ

この大前髪、剃り落としましょ。ドレ剃刃」

「アイヤ申し母者人。姿を変へて縄掛からば、『よく／＼命が惜しさに』と、云はれるも無念な。侍を

殺した場で、すぐに相果てやうと存じましたが、死

なれぬ義理にて生き存へ、一日々々と親の事が身に

染み、ま一度お顔が拝みたさに、お暇乞ひに参つて

かへって思ひを掛けます。アイヤ／＼矢つ張りこのまゝで与兵衛殿へ、お渡しなされて下さりませ」

「スリヤどう云ふても縄掛かる気ぢやな」

「覚悟致してをりまする」

「よいわ勝手にしをれ。われより先に」

と剃刃を

「ア、もし、母者人、危ふい／＼。謝りました／＼

／＼わいな」

「サアそんなら剃つて落ちてくれ」

と母が手づから合はせ砥に、かゝる思ひがあらうとは神ならぬ身の、白髪はこの身。剃るべき髪は剃りもせで、祝うて落とす前髪を、涙で、揉んで剃り落とす老いの拳の定まらず、わな／＼震うて刃先がぎつくり

「ア、申し二所までお顔に疵が」

「ハアひよんな事しました。幸ひ血止め」

と硯の墨、べったり付けて顔打ち眺め

「大方これで人相が変はった。ガ肝心の見知りは高

頬のほくろ。剃り落とさん」

と剃刃を、当てことは当てながら

「これこそは父御の譲り、形見と思へば嫁女。私はどうも刺りにくい。こなた頼む、剃り落として下され」

れ」

「私ぢやとてむごたらしうそれがどう剃られるもの。こればかりはお赦しなされて下さりませ」

「ア、思へば／＼、親の形見まで剃り落とす様になつたか。エ、心からは云ひながら、可哀いものや」

と取り付いてわつとばかりに泣き沈む

折もこそあれ門口より

「濡髪捕った」

と打ち付くる、銀の手裏剣高頬にびっしやり

「はっ」

と身構へ母は楯、おはやは灯火立ち覆ひ

「今のはたしか連れ合ひの声。ヲ長五郎様。顔のほくろが潰れたぞえ」

「ヒヤア、ほんにまことに。これも情」

と母親は表を拝みみたりしが

かねて覚悟の長五郎。思ひ設けてどつかと座し

「サア母者人。お前のお手で縄を掛け、与兵衛殿へ

お渡しなされて下さりませ」

「コレ長五郎様、お前は気が逆上ったか。『捕った』

と顔へ打ち付けて、ほくろを消した連れ合ひの心ま

たこの打ち付けた銀の包みに、『路銀』と書いた一

筆。そこにお心付かぬかえ」

「イヤその書付もほくろを消した心も、骨に堪へ肝に通り、あんまり過分忝さに、母の歎きも御意見も、

不孝の罪も、思はれず、不具な子が可愛いと、義理

も法も弁へなく、助けたい〜と母人のお慈悲心。

暫くはお心休めと詞に随ひ、元服まで致したれども、

一人ならず二人ならず四人まで殺した科人。助かる

筋はござりませぬ。なまかな者の手に掛からうよ

り形見と思ひ母者人。泣かずとも縄をかけ、与兵衛

殿へ手渡しして、ようお礼を仰れや。ヤアコレさう

なうてはこなた、未来の十次兵衛殿へ、立ちますま

いがの」

「オ、謝った長五郎。よう云うてくれたな。如何様

思へば私は大きな義理知らず、まことを云はゞ我が

子を捨てゝも、継子に手柄さするが人間。畜生の皮

被り、猫が子を銜へ歩く様に、隠し逃げうとしたは

何事。とても遁れぬ天の網一世の縁の縛り縄。おはやその細引でも取って下され」

「イヤそれでは連れ合ひの心を無になさるゝと申すもの。唐天竺へござっても、この世にさへござれば、どうしてなりともまた逢はれる。何かはなしに落としまして下さんせ」

「イヤなう、一旦庇うたは思愛。今また縄掛け渡すはなさぬ仲の義理。昼は庇ひ、夜は縄掛け、昼夜と分ける継子本の子。慈悲も立ち義理も立つ。草葉の陰の親々への云い訳。覚悟はよいか」

「待ちかねてをりまする」
と、おはやを取って突き退けく手廻すれば母親は幸ひあり合ふ窓の縄、追取って小手縛り。突き放せば引き縄に、窓は塞がれ心は闇、闇き思ひの声張り上げ

「濡髪長五郎を召し捕ったぞ。十次兵衛はゐやらぬか、受け取って手柄に召され」

と呼ぶ声に

与兵衛は駆け入り

「ホ、才、お手柄くさうなうては叶はぬ所。とても遁れぬ科人。受け取って御前へ引く。女房共もう何時」

「されば夜中にもなりましょか」

「白痴者。七つ半は最前聞いた。時刻が延びると役目上がる。縄先知れぬ窓の引き縄、三尺残して切るが古例。目分量にこれから」

と、すらりと抜いて縛り縄、すっかり切ればぐわらくく。差し込む月に

「南無三宝夜が明けた。身共が役は夜の内ばかり。明くれば即ち放生会。生けるを放す所の法。恩に着

「ずとも勝手にお行きやれ」

「ハ、ッ」と悦ぶ嫁姑。合はす両手の数よりも、九つの鐘六つ聞いて

「残る三つは母への進上」

「拙者が命も御自分へ」

「それも云はずときらば〜」

『さらば〜』の暇乞ひ別れて、こそは、落ちて往

く

団子売

〔解説〕明治一二年（一八七九）一月、道頓堀角の芝居にて初演。清元の玉兔月影勝から義太夫に転じて作られた作品です。団子売りの夫婦、杵造とお臼が杵と臼を夫婦に見立ててユーモラスに語ります。子孫繁栄を願ったおめでたい演目です。

「こんどく仕出しぢやなけんけれど、雪か花

かの上白米を、痴話と手管でさらせて挽いて、情で

こねてしっぽりと

「サアくこれはこの度大評判」

「御最負高い飛び団子、その真似ごとのひと踊り」

「そんならお臼」

「杵造さん」

「さらばこれから始まりく」

「飛び団子、やれもさうややれくさてな、臼と

杵とは女夫でござる。

やれもさうやれくさてな、夜がな夜ひと夜お

やれくな。とんが上から月夜はそこだよ。ヤレ

コリヤよいこの団子が出来たぞ。おやれくサ、

はれわいさて、これわいさて、どっこいさてな、よ

いとくくくくくよいとなとな、これわいさのよい

女夫、臼と杵との仲もよや。

「お月様さへ嫁入をなさる。ヤットきなさろせ、

とこせく。年はおいくつえ。十三七つえ。ほんに

え、お若いあの子を生んで、ヤツトきなさろせ、と
こせく。誰に抱かせませうぞえ、おまんに抱か
そぐえ。

見てもうまそな品物め。

へさうだよ。高砂尾上の、爺様と婆様が箒を手に
持ち、熊手をかついで目籠をしよひそろ。小松の枯
葉を、さらりと集めて、戻ろとしたれば、上の枝に
は鶴の巢籠り、下の小池にや女亀と男亀が、空を眺
めて、このや松はな、目出たい松にて高砂文句も、
こゝらでとめましょ、尾上。

へかくては尽きじと女夫連れ、かしこを指して

みょうと

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます